

木製の玉垣の頃の陵墓（資料提供；島崎誠氏）

安徳天皇陵墓参考地

『平家物語』によれば、安徳天皇を率いる平家一門は、文治元(1185)年3月源平最後の合戦である長門の「壇ノ浦の戦い」に敗れ滅亡したとされるが、天皇の御遺体が行方不明であることから“天皇生存説”が持ち上がり、各地に安徳天皇潜幸伝説が残っていて、「安徳天皇陵墓参考地」(宮内庁所轄)と称されるものが全国に5ヶ所存在する。

ここ高知県越知町に伝わる伝承では、1185年2月の屋島の「檀ノ浦の戦い」の段階で、合戦の最中に天皇の身代わりを立て長門へ向かわせ、本隊は阿波の豪族・田口成良に導かれて四国に上陸したとされている。

天皇一行は、「かずら橋」で知られる阿波国美馬郡東祖谷山に最初の行在所を造営した後、土佐国に入った。その後四国山地を横断するように、西熊山・御在所山・稲村(稲叢)山・宮古野(都野)・越裏門・椿山・別枝都と行在所を構えながら潜幸し、最終的に横倉山に辿り着いた。横倉山は要害の地であり、この地方を治めていた修験道の先達・別府氏の支援もあり、ここを終焉の地とした。横倉山の行在所跡は、陵墓(参考地)と隨身たちの屋敷25軒のあった「天の高市」(“別府の都”)のほぼ中程の、天皇が京の都の平安宮を拝したと伝えられる「平安の森」と小沢を隔てたすぐ南の小高い丘陵

にある。

当初300余名いた隨身たちも、横倉山に来た時は80余名にまでなり、天皇が崩御された後、天皇の陵墓を取り巻き護衛するように、天皇に随行了した平家一門と隨身たちの墓が築かれた。横倉山の山中にはそれら88社があると言われ、うち77社が確認されている。

安徳天皇は、正治2(1200)年8月8日、病のため御歳23歳で崩御され、御遺体は生前天皇が従臣たちとよく蹴鞠をして遊ばれた思い出の地“鞠ヶ奈呂”〔字名:「鞠ノ場」〕に葬られた。陵墓は、幅約3.7m、111段の途中で緩く「く」の字状に折れ曲がった石段を登り詰めた所にあり、御影石(花崗岩)製の二重の玉垣が巡らされていて、全国に5ヶ所ある陵墓参考地の中でも一際規模が大きく荘厳なたたずまいを見せている。地元では「鞠ヶ奈呂陵墓参考地」(正式には「越知陵墓参考地」)と呼ばれ、以前は25m四方の隅に“鞠掛の木”“神かけの木”が植えられていたという。

“鞠ヶ奈呂”は、山頂部の広大で平坦な地で、すぐ西隣には、天皇が乗馬を練習されたといわれる“御馬場跡”がある。現在は推定樹齢数百年のアカガシの原生林に覆われ、陵墓一帯は県内唯一の宮内庁の管轄下にある。

横倉山の「コオロギラン」

大 倉 浩 典

明治22（1889）年9月、東京から久し振りに佐川に帰った牧野富太郎（28歳）は、吉永虎馬や矢野勢吉郎と共に横倉山へ植物採集に出かけ、安徳天皇陵墓参考地前の石段の途中で昼食中に、杉の落ち葉の中に生えている僅か数センチの小さなランを見付けました。早速持ち帰り精密な解剖図とスケッチを描き上げ、標本と共に当時師事していたロシアのマキシモヴィッチ博士（日本植物の研究者）のもとに同定を依頼したところ、その植物は日本はもとより世界でも初めての新種のランであることがわかりました。牧野富太郎はその花の唇弁の色や形から和名を「コオロギラン」と名付けましたが、本種は横倉山を代表する植物の一つです。



ちなみに、「コオロギラン」を発見した明治22年は牧野富太郎にとってどのような年であったかと申しますと、前年の明治21年11月12日には念願であった『日本植物志図篇』第一巻第一集を、数年間石版屋に出入りして修得した技術で、自画・自筆・自刻しかも自費で出版した記念すべき年であります。また、翌年の明治23年は、「スエコザサ」で有名な寿恵子夫人と結婚されたり、牧野富太郎のあまりの活躍に嫉妬した東京大学の矢田部教授から大学への出入りを禁止されたり、師と仰ぐロシアのマキシモヴィッチ博士の急逝等これから始まる牧野富太郎の波乱万丈の人生幕開け前年ということになります。

「コオロギラン」は林内の落葉の中に生える極めて小型の腐生ラン科植物で、高さが5㍻前後、茎は淡緑色で極めて細く中程に三角形をした小さな一つの鱗片葉をつけ、8～9月頃茎の先端に小さな花を2～3個つけます。花の割に唇弁は大きく広い円形で淡紫色、周囲に微細な鋸歯があり唇弁の形・色・開花時期といい、和名の「コオロギラン」はピッタリの名前だと感心します。

小さなランなので最初に見つけるのが大変ですが、

横倉山では杉の落葉の中になら生えず、特に雨上がりの日、紫黒色に濡れた杉の落葉の中から真っ直ぐに伸びた茎の途中から出る独特の形をした三角状の鱗片葉は、周りの雑草の葉とは区別ができますので、最初の一本を見つければ後は2～3㍻離れていても割合簡単に見つけることができます。注意していただきたいのは、間違っても落葉を掻き分けて探すことのないようにして下さい。

非常に珍しいランで生育地も限定され、国内ではこれまで和歌山・四国・九州の一部、国外では台湾・インドでしか生育が確認されていません。高知県内では、今回の『高知県植物誌』作成のための植物調査でも、確認できたのは横倉山と大豊地区・物部地区の3ヶ所だけでした。

本家横倉山では、猛暑だった今年は8月10日前後から開花し始め、姿だけなら11月頃までは楽しむことができます。生育地も結構広く、第3駐車場から杉原神社に行く途中の近道の両側、杉原神社周辺、山小屋手前のトイレ周辺、『安徳水』（「全



国名水百選」）へ下りる道の両側、山小屋から少し上った所の小さな木橋の周辺、行在所跡入口周辺、『馬鹿試し』北の休憩所周辺、『安徳天皇陵墓参考地』東側周辺、及び参道石段の両側、石段下の谷沿い、“三嶽古道”井泉社前から『空池』の下

までの道の両側、“三嶽古道”の『一本木』周辺等、生息地のほとんどが登山道沿いですが、2、3ヶ所登山道から少し入った杉林の中で群生している所もあります。

ただ、平成16年の猛烈な台風の襲来以降全体的に林内が明るくなったためか、雑草が生え始め、特に「コチヂミグサ」「ツタウルシ」の生育が旺盛で、「コオロギラン」が負けてしまわないかと心配しております。

（おおくら こうすけ／元高知中央高等学校教頭・植物研究者）

仁淀川の過去と現在 —仁淀川はどのようにしてできたか— その2

満 塩 大 洗

はじめに

前巻の「その1」では、仁淀川流域全体の一般的な地形・地質について説明しましたが、今回は、仁淀川がどのような変遷過程で形成されたかについて述べます。

現在の仁淀川は、大きく見て、源流の四国最高峰・石鎚山(1982m)の面河山^{おもご}地から「面河川」として南東に下り、さらに、御三戸付^{みみど}近から高知県に到達して「仁淀川」と呼ばれほぼ東方に流れて行きます。そして、海拔約100mの越知盆地付^{さこおれ}近で坂折川が南西方向から合流し、そのすぐ下流で南東方向から佐川・斗賀野盆地から柳瀬川が合流し、川全体が大きく蛇行^{くさか}しています。さらに下流では、日高村で日下川が流入し、続いていの町付^{さこおれ}近で仁淀川は南方に向かって流れ、土佐市で西方から波介川^{はげ}が流入し最終的に土佐湾に流出します。

仁淀川は、約200万年以降の第四紀(人類紀)を通じて、“河川争奪”で重要な役割を果たしてきました。その結果、流域にはそれぞれの時代の地形、すなわち、山地・丘陵・段丘・平地などが形成されています。越知盆地までは仁淀川の両岸はV字谷に近い地形を成し、従って山地が見られること

になり、それよりも下流では丘陵が発達し、越知・佐川盆地付近では各時代の段丘群が見られるようになります。また、高知市内の「高知半盆地」^{*}では、鏡川の東流する朝倉付近でも前期更新世の丘陵や段丘が見られ、仁淀川の古環境の変遷を考察する上でも重要です。

流域の第四系と仁淀川の変遷史

仁淀川流域に見られる第四系(第四紀層)は、氷河期とその間氷期^{かんびょうき}の繰り返しによって生じる海水準の低下・上昇、すなわち、「氷河制海水準変動」によって形成された河岸段丘で特徴付けられます。

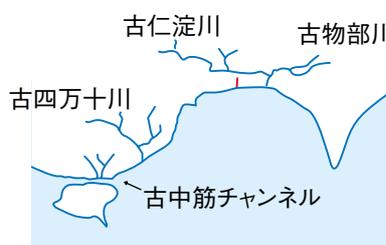
「山地」を形成するのは、先第四系で、これらは前述の各地質帯の古い岩石類からなっています。第四系は、前期・中期・後期更新世～完新世のそれぞれ特徴的な地層から成っています。

丘陵をなす前期更新世〔約200～80万年前〕の地層(プレ段丘)は、半固結した地層で、かなり締まっています。仁淀川流域にはこの時期の地層は見られませんが、高知市中央部の万々^{まま}付近に見られ、「万々層」と呼ばれています。

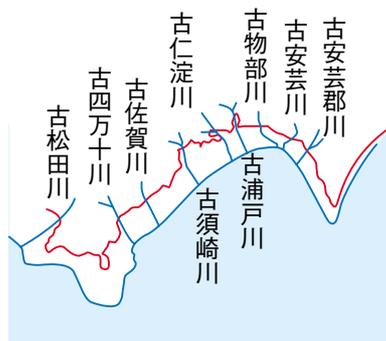
中期更新世〔約80～14万年前〕の地層は、「高位



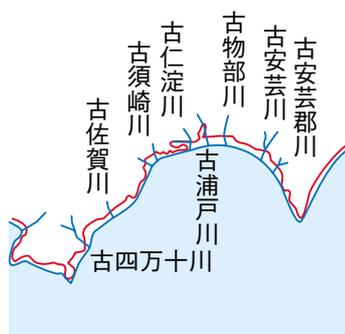
中期更新世 (高位段丘形成時=約80～14万年前頃)



後期更新世 (中位段丘形成時=約14～2万年前頃)



後期更新世 (低位段丘形成時=約2～1万年前頃)



完新世 (沖積平野形成時=約1万年前以降)

■ 海
 ■ 現在の海岸線
 ■ 旧河川・海岸線

段丘」を形成しており、「クサリ礫」から成っています。「クサリ礫」とは、礫もマトリックス（礫の間を埋めている細粒の物質）も識別が困難なくらい風化が著しく進んでいて「くさった」状態で赤褐色を呈しています。越知・佐川町では「小舟層」がこれに当たります。高知市西部では「城山層」と呼ばれる地層が見られ、古仁淀川が東流一いの町のJ R鉄橋付近から高知市朝倉の方に流れていた一していたことを示す重要な証拠です。

後期更新世〔約14～1万年前〕の地層は、「中位段丘」と「低位段丘」を形成しており、前者は「半クサリ礫」から成っています。仁淀川流域では「楠原層」、鏡川流域では「能茶山層」がこれに当たります。一方、後者は新鮮で固い砂礫から成り、越知盆地では「井関層」がこれに相当します。越知の市街地のある台地もこの時代に古仁淀川によって形成された河岸段丘です。この時代は、最大の氷河期で、海水準が著しく低下した“最大海退期”に当り、海水準が約140mも低下し、その結果土佐湾の陸棚平坦面が広く形成されました。

最後に、最も新しい完新世（沖積世）〔約1万年前～現在〕の地層は、“沖積層”と呼ばれ、その表面は沖積平野や海岸堆積物で覆われています。この時期の初頭に起こり7000～5500年前に最盛期を迎えた「縄文海進」によって海水面は約10m上昇しました。そして、その後の“弥生小海退”によって、海水面は4～5m低下し、桂浜の東と西に砂礫嘴が形成されました。

海岸沿いに形成された“砂浜”を構成する砂礫の種類や大きさを調べることによって、それらがどこからどのような運搬作用によって運ばれてき

たかがわかります。例えば、土佐市の宇佐から夜須町手結岬までの土佐湾沿岸中央部の堆積物について詳しくしらべた結果、丸い円礫は仁淀川流域の地質帯（主として三波川帯・秩父累帯）からもたらされたことがわかっています。また、礫の角の取れ具合（円磨度）を示す指数から河川の運搬作用の営力がわかります。これらからすると、上記堆積物は、仁淀川河口から浦戸湾以東の種崎東方まで到達し、それ以東のものは物部川に由来することもわかっています。“月の名所”桂浜の「五色の石」や石鎚山系の石なども仁淀川によってはるか上流から運ばれてきたものです。

古物部川は、後期鮮新世〔新第三紀〕ないし前期更新世から現在までずっと存在していて、現在の土佐湾に流出しています。つまり、“古土佐川”は古仁淀川と古物部川とが合流した巨大河川であって、現在の南国市の後川付近で古土佐湾に流出していたのです。この古物部川を含む“古土佐川”が、例えば植物のキク属の分布のバリア（障壁）となっていて、現在の物部川を挟んで、東にシオギク、西にノジギクという顕著な分布の相違が認められる原因となっていて、「物部川バリア」と呼ばれています。

つまり、高知県の中央部・東部では、現在の仁淀川は中位・高位段丘が形成される頃には東流しており、物部川はほぼ現在の位置を流れていたのです。

※完全に山地・丘陵で囲まれず、どちらか一方（高知市の場合東側）が開けている盆地

（みつしお たいこう／NPO法人 青い地球理事長・高知大学名誉教授）

横倉山ミニ歳時記

■愛のキューピット？— “ハートカメムシ” —

秋の気配の色濃くなった10月9日の昼下がり、眼下に150万本のコスモスの咲き乱れる宮の前公園と清流・仁淀川を望む博物館の3階展望ロビーに、一匹の背中に白い“ハートマーク”のある変わった縁起のいい？「カメムシ」が現れました。ふつうカメムシは、触れたりつぶしたりするとひどい匂いを放つため人に嫌われがちですが、こうなると見つけた人は「何かすてきな人との出会いがあるかもしれない……」というわくわくした気分させられます。

カメムシ（亀虫）は、半翅目カメムシ科に属する昆虫で、日本にはアオクサカメムシを代表とする約90種がいるようです。越知町関係では、横倉山でベニツチカメムシと呼ばれる鮮紅色地に黒紋のある大変美しく珍しいカメムシ〔絶滅危惧種；県内の4ヶ所で確認〕も見つかっています。一般にカメムシは、稲などの植物の汁を吸って枯らすため農業害虫とされています。問題のカメムシは、調べてみると、「エサキモンキツノカメムシ」という種類のものだとわかりました。

農家の方に迷惑をかける害虫扱いをされず、“幸せを運ぶ”親しまれる昆虫であって欲しいですね。



博物館ニュース

〔博物館教室〕

《昆虫》

『アサギマダラの観察とマーキング・放蝶』

〔2008年7月27日(日)；参加者：子供6名、大学生3名、大人6名、指導者：山崎三郎(高知県自然観察指導員)、助手：1名(高知アサギマダラネットワーク)、協力：中江産業株式会社〕



今年も、「日本三大美蝶」の一つで“渡り蝶”として有名なアサギマダラのマーキング調査を行った。

当初、四国カルスト高原で行う予定であったが、直前に都合でできなくなり急きょ昨年と同じヨツバヒヨドリ（“秋の七草”の一つフジバカマの仲間）の多く自生している寒風山南麓で行うことにした。

4日前にルート作りと安全のための下草刈りに行った時にはたくさんのアサギマダラがいて、「是非この光景を子供たちに見せてあげたい。この状況下でマーキングさせてあげたい…」と期待したが、残念ながら当日の早朝すでに誰かがマーキングを大量に行っていて、アサギマダラの姿は極端に少なかった。結局、全員で18頭、一人当たり1～5頭採捕・マーキングができたに留まった。

アサギマダラは、不思議な行動をし、飛行ルートがまだはっきりしていないなど“謎の多い”蝶で、マーキングすることによってやがてその謎も解けると考えられ、意義のある調査だと言える。

「アサギマダラを見るのは初めてで、その美しさに感動しました。マーキングした蝶達がどこまで飛んで行くかロマンがありますね…」などの感想があった。

《植物》

『お米のいろいろ ―その歴史と種類・使い道―』

〔2008年8月3日(日)；参加者：子供5名、大人3名、講師：恒石直和(前高知市こども科学図書館館長)〕

今年は、原油の高騰で小麦等の穀類が値上がりし、米が見直されたことから、お米について考えてみることにした。

「三内丸山遺跡」(縄文時代・青森県)で代表されるように、5500～6000年前はまだ米はなく、クルミやドングリを食べていた。縄文時代の終わりに水稲が始まり、「板付遺跡」(福岡市博多区)から縄文晩期末の水田跡がすでに確認されている。日本の稲作の起源が日本史上長い間弥生時代からとされていたものが縄文時代にまで遡ることになった。その頃の米は、“古代米”と呼ばれる玄米の色が黒・

赤・緑の有色米(日本で最初に作られたのは“赤米”)であった。稲の原種である野生稲で、品種改良された現代の米に比べて収穫量は半分以下と少ないが、荒地で無肥料、無農薬でも丈夫に育ち、干ばつ・冷害などにも強かった。

世界の米には、ジャポニカ米とインディカ米の2種類があり、前者が日本で作られているような小粒のずんぐりした粘りのある米で、「うるち米」と「もち米」とがある。日常主食として食べているのが前者で、デンプンの構成成分であるアミロース(20%程度)とアミロペクチン(80%程度)を含む。後者は、玄米は白っぽく粘り気の多い米で、餅や赤飯などにして食べられ、アミロペクチン100%から成る。インディカ米は日本を除く東南アジア諸国で作られている、細長くてサバサバした米で、世界の約8割がこれである。この他、炊いていると独特の良い香りのする「香い米(匂い米)」というもある。

米の用途は幅広く、ジャポニカ米は日本酒、糊(障子・掛軸・箆笥の裏板の貼り付け)、紙すきののりとして、インディカ米は沖縄の地酒『泡盛』などに使用される。



《工作》

『魔訶不思議!オリジナル万華鏡作り』

〔2008年8月17日(日)；参加者：子供18名、大人14名、講師：橋本 優(日本リサイクル万華鏡協会)〕

今年も、リサイクル商品を使った自由自在に変化する人気の高い“夢のある”万華鏡作りを行うことにした。

人間の目の焦点(約18cm)に合わせた鏡筒(紙製の反物の芯)に大きさの異なる三角形を両端とする三角柱のミラーを挿入し、一方(視き穴の反対側)にプラスチック製の試験管を装着し、各自好きな色とりどりのビーズを入れ(あまり入れ過ぎない)水：水のり=1：1(流動性がよい濃度)を注ぐ。後は好きな色紙～包装紙を鏡筒に貼って自分独自の“オリジナル”な万華鏡の仕上がりである。



《化石》

『約2億2000万年前の二枚貝・モノチスの化石の採集』

〔2008年8月24日(日)；参加者：子供13名、大人9名、講師：安井敏夫(横倉山自然の森博物館学芸員)〕

近年、越知・佐川に限らず県内で化石採集のできる場所がほとんどなくなってしまったのが教室開催の悩みの種である。結局、今年は越知と佐川の境の乙川地区において地主に採集許可を得て何とか教室を開くことができた。



植林地内の小さな沢沿いの露頭から産する中生代三疊紀〔約2億2000万年前〕の示準化石である二枚貝「モノチス」を採集する。薄い殻と顕著

な放射肋をもった皿型をしているため“皿貝”とも呼ばれ、現生のホタテガイの祖先型に当る。結構密集して生活していたのか、小さな露頭から転がり落ちた細粒砂岩～砂質泥岩中から比較的容易に化石を見つけ出すことができ、参加者のほとんどが十分な量の化石を採集できたようであった。化石採集のマナーをよく守り、化石のもつ意義をよく理解し、一夏の思い出としていつまでも大切にしたいものである。

企画展：『藤原花子染織展—おばあちゃんの手仕事—』

〔2008年4月19日(土)～5月11日(日)〕

地元越知町出身の染織作家・藤原花子氏が、身の回りにある植物(梅・桜・冬青・臭木・ヤシヤブ・茜・ヨモギなど)で染めた草木染めの絹糸を材料として、昔ながらのはた織機を使って織った作品(着物・帯・反物・スーツ・ネクタイなど)を展示。

自らの子や孫にプレゼントすることを喜びにひたすら30年間織り続けてきた作品の披露と米寿を記念して、“花子おばあちゃん”に感謝の気持ちを込めてお子さんやお孫さんたちが献立て、地元の博物館との共催で開催した心温まる企画展だった。

草木染めとは思えないような落ち着いた上品な色合いの作品に会場がうっとりするような雰囲気に満ちていた。なお、



期間中、期間限定で「はた織り体験」も行われた。

「草木染めの柔らかくやさしい色に感動しました」「自然が創り出す美しさを見せて頂きました」「ぜひこの技術を残し続けてください」などの感想が寄せられていた。

企画展：『第30回記念 高知県写真家協会展「土佐」』

〔2008年6月27日(金)～7月6日(日)、主催：高知県写真家協会〕

土佐の伝統ある祭りやイベント、生活・風俗、風土の記録などを対象とする写真を、140点の募集作品の中から選抜き30～40点を展示。

少しでも多くの人々に観賞していただきたいという協会の願いで、県下3地域(東・中・西部)を会場とする移動展。

土佐の豊かな自然や地域に古くから伝わる、また、地域の人々の熱意で復活した伝統のある祭りを絶やすことなくいつまでも記録に留め、後世に伝えていきたいものである。

企画展：『昭和のレトロ展』

〔2008年7月19日(土)～9月7日(日)〕

敗戦後の高度経済成長期から経済大国への仲間入りの道を歩み始めるようになった昭和30年～40年代にかけての車・バイク・自転車などの乗物、生活用品、おもちゃ・道具等



を展示。ビデオ・紙芝居の上映、昔ながらのガラスの器と手動の機械によるかき氷・ポン菓子の実演販売も行う。今回は多くの町民の方々から、資料の提供等の協力を得た。

生活は貧しくとも、人々に“ぬくもり”や“いたわり”があり、夢と希望をもって生きていた“古き良き時代”に帰り、当時の懐かしいやすらぎの世界に浸ってもらう。ほとんどの人が「懐しい」という気持ちをもって観覧してくれたようである。特に、大人にとっては青春時代の思い出がいっぱい詰まった当時のことや家族との生活のことを思い出し、子供にとってはビー玉やメンコ、フラフープ、缶ポックリなどの昔の遊びに触れ、夏休みの自由研究のヒントになったという声もあった。

主な感想として、「楽しい思い出がいっぱいありました」「懐しい昔を振り返りとてもよい時間を過ごすことができた」「古くもあり新鮮でもある。また企画して欲しい」「温故知新です」「すばらしい企画だと思います。スタッフの皆様熱意に頭が下がります」などがあつた。来館者の方々、少しでも心が癒されたことは企画展を開催した甲斐があつた。

友の会だより

「呈茶」

〔2008年5月4日(日)、3階テラス 協力：越知茶道サークル〕

今年も、来館者へのもてなしとして、眼下に清流・仁淀川を見下ろす眺望のいい3階展望ロビーにて抹茶のサービスを行った。

「炭焼き」

〔2008年6月14日(土)、参加者；友の会会員13名〕

平成17年から続けている炭焼き。毎年6月には、恒例の“炭窯を守るための炭焼き”を行う。

「スターウォッチング」

〔環境省と(財)日本環境協会主催の「全国星空継続観察事業」〕

〔2008年7月31日(木)、参加者；5名、講師：元横倉山自然の森博物館館長 片岡重敦氏〕

横倉山自然の森博物館3階展望ロビーにて、天の川の中にある白鳥座・射手座、琴座の観察を行う。

「山の学校キャンプ―木や竹で遊ぼう―」

〔2008年9月20日(土)・21日(日)、参加者；友の会会員9名、一般31名、講師：NPO法人四国自然史科学研究センター長 谷地森秀二氏、県中央西林業事務所 福留将史氏〕

木や竹を使った椅子・本箱、食事に使う箸・器作り、竹筒炊飯などの“もの作り”の楽しみを体験する。

併せて、友の会「フォレストクラブ」で作った炭を使っ

「白髪山の自然観察会」

〔2008年5月11日(土)、参加者：友の会15名、事務局1名、案内：山下幸利(ギャラリー 汗見川清流自然館館長)〕



5月10日の「地質の日」記念事業をも兼ねて、白髪山(高知県長岡郡本山町)の自然観察会を行う。

往路車中で汗見川に分布する岩石(三波川変成岩)について学習し、さらに途中「汗見

川清流自然館」を見学し目的地に向かう。白髪山は、「白髪山県立自然公園」内にある標高1,470mの山で、植物(特にブナ科の植物や高木)の成長にとってはあまり適さない蛇紋岩できているにも拘らず樹齢100~200年の天然ヒノキ(“ヒノキの原生林”)が自生し、南面の白骨林とホンシャクナゲで有名であるが、アケボノツツジとウラジロモミの群生も見られ、みどころの多い山である。そのためか、牧野富太郎博士も73歳の昭和9(1934)年8月9日に登山を行っている。

白髪山のヒノキは、中世の長宗我部時代には豊臣秀吉に献上され、江戸時代には野中兼山が土佐藩の林業の要とし

不要な伐採を禁じ幕府への献上用材として管理され、藩の重要な資金源として藩の財政を度々救ったという。

山頂までの植物については、地元の山下幸利氏の説明を受けながら登ったが、白髪山のヒノキは、色艶が良く、粘り気があり、目が詰んで腐りにくいため、江戸城本丸・仙洞御所(京都)などにも使用されたという。山頂付近の南面に広がるコメツガ・五葉松・ドウダンツツジの緑の植生の中に点在するヒノキの白骨林とピンク色のアケボノツツジのコントラストが印象的であった。

「仁淀川水質調べ」

〔2008年6月7日(土)、「身近な水環境全国一斉調査」への参加行事。参加者；友の会会員13名(内小学生以下2名)、一般1名、事務局1名)〕

仁淀川〔一級河川〕の支流・坂折川の下流、桐見ダムの下・上流の計3ヶ所で行う。いづれの地点でも、“とてもきれい”な水質を示していた。オオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕が生息し、



「きれいな水」の指標である水生昆虫が確認されることからそれを裏付けるデータであった。

調査後、流域で野生のユリの中で最も美しいとされる「フクリンササユリ」の観察会も行った。

「杉原神社のヒメボタル観察会」

〔2008年6月27日(金)、参加者；友の会会員18名、一般32名)〕

横倉山山中にある杉原神社付近において、恒例のヒメボタルの観察会を行う。幼虫は陸生でカタツムリなどを食べ、成虫は体長約7mmと小さい。オスは飛翔しながら発光するが、メスは飛べないため草木に止まった状態で発光する。山中の真っ暗闇の中で光るほのかな明かりの光跡は神秘的である。

「3階展望ロビーにおける結婚式挙式」

5月18日(日)、博物館の建設から携わった元博物館職員の御長男・小田壮志、由圭両名の結婚式の挙式が、風薫る若葉に包まれた博物館3階展望ロビーにおいて神式で執り行われた。



これまででも、越知町内の新郎・新婦による挙式は5、6件行われたことがあるが、神式によるものは今回が初めてである。神職の祝詞に続き玉串を捧げ、二人の巫女を介して三三九度の盃を交わし、誓いのことばを述べた後、指輪の交換を行い、互いの深い絆と幸せを神に誓い新たな人生のスタートを切った。

〔博物館日誌(抄)〕

- 3月1日(土)～4月13日(日)
春休み企画展：『横浪半島の自然』
- 4月19日(土)～5月6日(火・祝)
企画展：『米寿記念 藤原花子 染織展
—おばあちゃんの手仕事—』
※期間中機織の実演
- 6月26日(木)～7月6日(日) 『高知県写真家協会 写真展』
- 7月19日(土)～9月7日(日)
夏休み企画展：『昭和のレトロ展』
※期間中昔ながらの機械を使っの「かき氷」と「ボン菓子」の実演販売
- 7月27日(日) 夏休み博物館教室〔昆虫〕
- 8月3日(日) 夏休み博物館教室〔植物〕
- 8月17日(日) 夏休み博物館教室〔工作〕
- 8月24日(日) 夏休み博物館教室〔化石〕
- 9月27日(土)～11月3日(月・祝)
企画展：『自選展—野並允温の世界—』
※期間中絵画教室開催
- 12月13日(土)～2月15日(日)
企画展：『川添 晃 水彩画展
—土佐日記の世界 1980年の記録より—』

〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成20年度活動予定〕

- 4月19日(土) 炭焼き体験
- 4月27日(日) 横倉山散歩
- 5月11日(日) 白髪山の自然観察会
- 5月4日(日) 「呈茶」(3階テラス)
- 5月25日(日) 友の会総会
- 6月7日(土) 仁淀川水質調査とササユリ観察会
- 6月14日(土) 炭焼き体験
- 6月27日(金) 杉原神社のヒメボタル観察会
- 7月31日(木) スターウォッチング4—夏の天の川・こと座—
- 9月20日(土)、21日(日) 山の学校キャンプ
—木や竹で遊ぼう—
- 11月15日(土)、16日(日)
「天然記念物コウノトリの保護活動と
兵庫県・山陰海岸国立公園」視察研修〔1泊2日〕
- 12月 炭焼き体験

スタッフの声、声、声

〔西森〕 この間開催された博物館の企画展、地元越知町出身の画家・野並允温氏の自選展では、ネパールの壮大な連山を描いた大作や、越知町の大樽の滝(「日本の滝百選」)・棚田・一本杉・沈下橋などを題材にした作品が紹介された。

いつも見慣れた風景も、プロが描けば「正に絵になる」と痛感した。越知の自然や風景、たくさんの方に見に頂きたいと思う。

〔西川〕 越知町と友好交流町である北海道滝上町へ行ってきました。市街地の中央を流れる溪谷「錦仙峡」は早くも紅葉を迎え黄色や赤色に色づく木々に目を奪われます。100年前、この地に立った越知町からの入植者たちもこの景色を見て頑張っていたのでしょうか。

〔安井〕 今年の夏は例年になく猛暑でしかも湿度が高く、さすがに身体に堪えてしまった。仲秋の名月も蒸暑い夜で、何となく月を賞でる気になれなかった。それに今年は見月にお似合いのススキもまだ少し時期が早かった。とはいえ、草花は季節を忘れず、やがて秋の訪れを知らせてくれる曼珠沙華が咲き誇り、虫の音も次第に賑やかになってきた。季節の中でこの頃が最も好きであるが、過ぎ去ってしまえばつらかった夏、季節の移ろいにも何かしら“名残り”を感じてしまう。四季折々に風情のある日本に生まれて本当に良かったと思う。

〔小松〕 来館者に見ていただくこと、2、3年前から駐車場脇の石垣の上で咲き始めた横倉山産の優美なトサジヨウロ

ウホトトギス〔横倉山タイプ植物；絶滅危惧種〕が一晩のうちに球根目当てのイノシシ?に掘り返されてしまいました。葉の勢いがなくなり今年は花はもうだめかと諦めていましたが、プランターに植え替えてみんなで大切に世話をしていたら小さな蕾が段々ふくらんできて見事に美しいレモン色の花を咲かせてくれました。自然の“ど根性”には本当に頭が下がります。

〔伊藤〕 今年もトサジヨウロウホトトギスに会いに横倉山へ登りました。去年より蕾がたくさんついでとても綺麗でした。コオロギランは時期が遅くて花はありませんでしたが、去年は見られなかったヒナシャジンを見ることができ良かったです。横倉山へは一年ぶりだったので雪が降るまでにもう一度行こうと思いました。

〔小野〕 今年は芸術の秋を堪能しました。野並允温さんの絵画展はもちろん、同級生の個展、更には初めて陶芸に挑戦してみました。冷たい粘土と格闘すること約三時間。想像よりも大きな物ができましたが、あとは焼き上がりを待つのみ。みなさんはどんな秋が好きですか？



高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知—JR特急 約30分—佐川—バス 約15分—越知
JR普通 約50分

